

蠅螂の斧

第二部

トークライブ2001

第一回

団 士郎

仕事場D・A・N/立命館大学大学院

二〇一四年、新年早々に泊まり込んだ仕事場で雑誌を読んでいた。そこでひらめいたプランがとても良いように思えるので今回はそれを書く。上手くいけば、このシリーズで継続することにする。

手にしていたのは「本の雑誌」一月号。記事は津野海太郎氏の連載「百歳までの読書術・老人にしかできない読書」である。要約してしまうと、「それから何十年かの時間が経過した・・・」と言えるのは老人だけだ。忘れなければ過去の読書の記憶を、現在に呼び込んで、縦横無尽に語ることが可能だという話である。

こう書いて直ぐに気付いたが、それは連載の第一部で行っていたことではないか。二〇年前の児童相談所の日誌をひもといて、今その事を洗い直してみる。私の記録を私が見直すのだから、客観的事実ではあり得ない。しかし、これこそ記録される歴史であり、時間を経たところで行われる検証だ。ここ二回ほど似たことを、時間を行きつ戻りつ行ってきたが、いよいよ第二部を開始する切り口が見つかった気がしたのである。



時は二〇〇一年、今から十三年前。私は京都でトークライブと称するものを始めていた。最近ではトークライブというような言い方を目にすることも多いが、その頃は誰もそんなことは言わなかった。ライブはミュージシャンの専売だった。「報道ステーション」をやり始める前の古舘伊知郎氏が、喋りっぱなしのライブを「トーキングブルース」と名付けて東京でしていたのを知っていた。そして自分もそんな事が出来るんじゃないかと思ったりしていた。

そんな時、以前講演を依頼されたことのあるビジョンヘルスケアズ kkの石田章一さんから、「京都駅前ルネッサンスビルの部屋を継続して使用する事が出来るんだけど、私の所のプランは一区切りするので、団さん、後を受けて何かしませんか？」と打診された。

頼まれて講演する事は多くなっていたが、自分で準備して、しかも定期的に開催するような企画は考えたことがなかった。そんなことをすると、集客や採算、告知や準備で一人大忙しになって、結局祭りのあとの脱力と孤独を引き受けることになると思っていた。

ところがこの会場に関する条件が画期的だった。よみうりカルチャーセンターの枠内に位置づけられた会議室使用料金は、その日の入場者の売り上げの半分。高いような気がするが、これは多数の集客を必須にする必要はないということでもある。1000円の入場料で一人しか来なかったら、500円支払えばよいというわけだ。正規に部屋を借りたら、京都駅前の一等地のビル、とてもそんな値段にはならない。ちょっと面白そうな気がした。

椅子を並べて定員50くらいの部屋に、結果的に最高50人余り。だいたい20~30名くらいの有料入場者のために毎月、一時間のネタを二本立てで実施した。これを結果的に三十七回続けることになった。

第一回の演目は(一)「女子大のユーモア特論」(二)「シリーズ 家族カタログ①《時事問題としての家族・子育て》」

そして開演までの時間つなぎにと、毎回配布したのが「仕事場D・A・N通信」という名のミニコミ小冊子。中味は「木陰の物語一篇+先月の私の活動日誌」だった。

ここではその日誌を掲載し、第一部同様に、その時間を今の目で見つめ直してみる。一昔以上前のことではあるが、昔話にはしないのを身上に書き始めてみたいと思う。

*

2001年4月から、私は立命館大学大学院応用人間科学研究科・家族クラスターの教員になることになっていた。1998年に京都府を退職して、ワークショップをしたり、相談室のカウンセラーをしたり、いくつかの大学の講師をしたり、初めての単著新書を書いたりして3年、様々なことが現在の形に向かって動き始めた年だったとも言えるだろう。

2014/02/15

では、2001年春三月

3月★日 和歌山県山中にあるフリースクールを見学した帰りだと中島弘美さん（本誌連載中）が来訪。私立全寮制、週末帰省方式の学校である。イギリス・サマーヒル（フリースクール）の日本版。今春、高校卒業生が出るそうだ。その人たちの十年後が、学校理念の成果となるだろう。ここは不登校や非行生徒を集めたタイプの学校ではない。在校しているのは、親が比較的裕福で教育に意見を持った家庭の子という気がしたとか。はたして今後日本に、もっといろんな学校が出てくるのだろうか？でも、学校教育制度っていつも、経済的社会的階層とリンクしているから…。

確かなことが言えるわけではないが、こう書いた時と比較して今、日本の学校に関する話題展開は更に悪く変わってきていると思う。

定着した不登校問題は相変わらず動かない。その後、学級崩壊や発達障害など、次々に新しい事態とキーワードが登場し、スクールカウンセラー配置

の十数年を経て、スクールソーシャルワーカーも配置されている状況がある。

いじめの温床のようにメディアが書き立て、警察や市長までが口を出す状況に、私が住む大阪市の中学校は追い込まれている。良くなったことなどないから、更に**専門家と称するトッピング**が現場に配置されていくのだろう。（これが大したキャリアなどない、新種の一人配置専門職）

長期ビジョンなど持てない教育系公務員が、短期で異動してゆく現場に、確かな教育システムが生まれる気配はない。

そんな中、わが子だけはと思う中流以上の豊かな層（最近、中流小市民が大幅に減少だが、大企業のサラリーマンや共働きの教員など、まさにこれ）が、有名私学を選択させてお受験に向かった。子ども達はますます早期から塾通いに取り込まれ、地域の公立校はそこからこぼれた子達の通う場所になる。

地域の力とかネットワークと言いながら、私生活では地域の社会資源である子どもを、隔離してしまうように遠距離通学させる。

そして更に近年は、学校が塾や予備校産業に迎

合である。共同で・・・などと言っているようだが胡散臭さが消えない。現実(日本の受験制度)という身も蓋もないごり押しの言説に、学校の弱腰が透けて見える。

そしてこんな事態になると、政治が教育にあれこれ口を出して憚らなくなる。詳細に関心を持っているわけではないが、道徳教育を正課とか、教育委員会制度の見直しとか、現実を上手く構成できない現任者の力不足が、外圧をつけあがらせている。

3月★日 朝からK I S W E C (京都国際社会福祉センター)で家族面接担当。Sさん夫婦はゆっくりでも何かいい変化を作りつつの日常を過ごしている。積極的に変化をしかけるより、お母さんのテンポに添った面接。久田さん、千葉くん(本誌連載中)らバックスタッフと一緒に昼食。午後はKさん夫婦の面接。次々ととんでもない事件の起こる家族。進級問題はどうなるのか?展開次第だが。

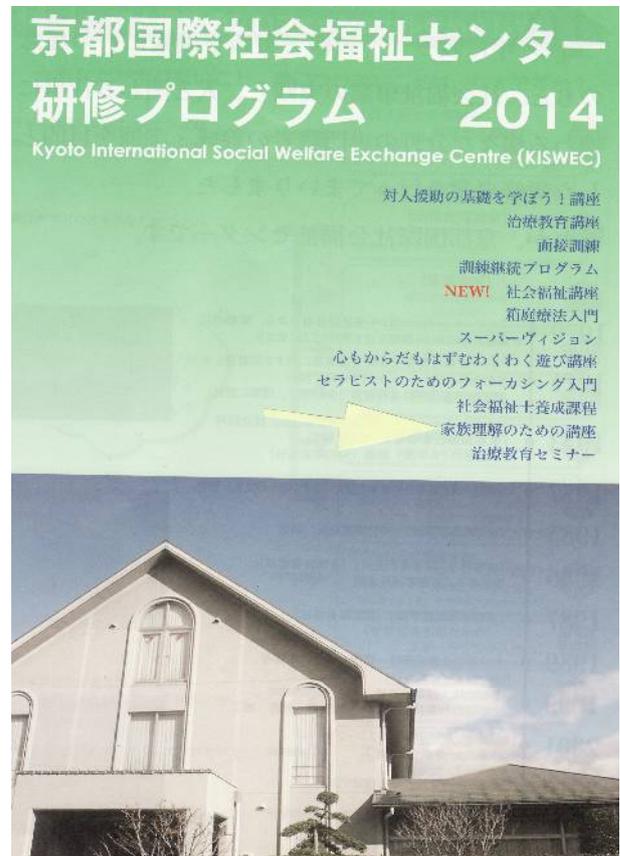
現在に至るまでなかなか軌道に乗りにくいのがK I S W E Cの家族面接室である。ここでの家族療法訓練は25年に及ぶプログラム継続があり、「step1,2,3」、「原家族WS」など多様に安定的に展開している。(K I S W E CのHPに案内あり)

しかしここを常設の家族療法クリニックのような形式にはできないために、研修プログラムに比べて実践の展開はもどかしい。形が整えられない結果だが、常勤専任家族カウンセラーの重要性を思う。昨今の世間は非常勤専門職で溢れているが、そこでは目に見えない不備が重ねられているに違いない。

新たにその職に就く人は、予め奪われているのだから、働き始めてその問題に気づくことは少ない。業務をそういうものだと認識してしまうと、そこからしか新たな言葉は始まらない。

しかし、本来整っていかなければならない形式の不十分によって、業績や担当者のキャリアが定着蓄積しないことは、システムを考える人

間としては気づいておかなければならない。個人の力量に収束してゆく程度の専門職ばかり増やしてゆくのは、世の中や、その業界を壊しにかかっているのと同じかもしれない。



03/★ 奈良市生涯学習センターを会場に、奈良wsプログラム。参加者十九人で順調にすすめる。昼食は明倫館というレストラン。欧風手料理という、なかなかのおいしさ。南さん以外にも意欲的な奈良市の保健師さんたちがいて、継続の匂い。午後は話をちょっと多めだったが、ビデオの見直しと、名付けのエクササイズ。帰路の近鉄特急に乗ったら疲れていた。

奈良のWSプログラムは結局、数回で中断になった。熱心に児童福祉に取り組んでいた南さんが、一般行政職員だったため、畑違いの職場に異動してしまったのが大きかった記憶がある。

地域の継続WSは様々な要因で頓挫する。現在十ヶ所以上の地域で、続いているのは奇跡的だ。何でもそうだが、上手くいかない理由は山のようにある。

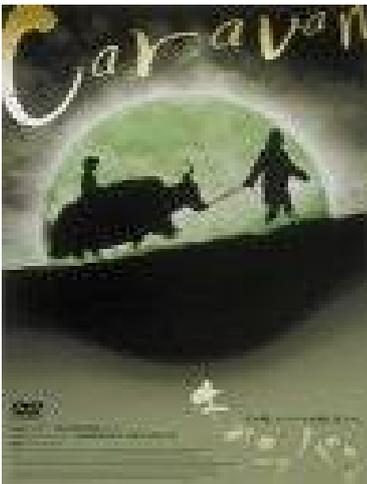
上手くいくとは、それを乗り越えて、持続が形成できるといふことである。

失敗にではなく、成功に学ぶべきところが多いはずだが、世の中の人たちは上手くいかない話の方に関心が強いようだ。また、システム・枠組みを作ることがいかに大変かということに気づいていない人も少なくない。

経済学用語に「フリーライダー」というのがあったと思うが、仕組みへのただ乗りのことである。当然、システムそのものも利用者からの還元、フィードバックによって支えられている。

利用者のコンテンツの不備から、システムそのものが崩れることも少なくない。そしてそこには大した思考も反省も働かず、元の木阿弥に帰す。組織や仕組みが、こんな事を繰り返しているのを見ることも多い。

3月★日 昨夜は珍しく早く寝た。そこで朝も八時半に起床。九時半すぎには、三条大橋のスターバックで鴨川を見ながら住友金属の原稿描き。三月中に予定している作業のはかどりが順調なのでゆったり気分。今月は出張仕事が比較的少ないので、自由になる時間が多い。



で、ちょっと迷っただけけれども、映画「キャラバン」を観ることにした。小劇場ゆえ最前列に座っていたのだが、二列目でガサガサ音がする。同じように気になるのだろう、四席向こうの女性がちらちら後を見るが止まない。合図してみたが、画面に集中しているのか伝わらない。だいぶ時間

は経っていたが、気になって仕方ないので、ふりかえって身を乗り出し、カバンのなかの食物を摘み出している手をつかんだ。怪訝な顔をするので、この音がうるさいというサインをした。

その時わかったのだが、耳の遠いお爺さんだった。だから自分のガサガサが気にならないのである。何だか気分が迷惑モードじゃなくなってしまい、同じように耳の遠くなった父親を思い出してしまった。

字幕映画はストレスなく観られる楽しみなのかもしれない。昼一番の映画を、ものを食べながらの鑑賞。それくらいの自由があっても良いのかもしれない。

耳が遠くなると自分の声が大きくなったり、他人の話が聞こえにくいので、自分の話す量が増えたりする。私など、そうなる前からこれだから、だんだん耳が遠くなるとどうなってしまうのだろう。

映画館のこの手の迷惑行為は時折経験する。自分のたてるガサガサ音は案外気になっていないものだ。だが、「迷惑」を言い過ぎると、とても他人のミスに手厳しい社会になってしまう。

私自身はミスの少ない方のタイプ(最近、なくし物が増えてきたが)だと思うから、気をつけないと、とても暮らしにくい、不機嫌な世の中作りの一員になってしまうのだろう。

住友金属(社内報「鉄っ子」の仕事)というのは、三十年近く続いたイラスト仕事。新聞などの漫画連載は、半年、一年で変わってゆくのに比べると、安定した原稿料収入として有り難かった。ただ内容は全く注文通りなので、作品として残ることはなかった。

3月◆日 年度末の空気のせいだろうか、時間があっても、次々雑事に追われている。坂口(税理士で義弟)に作ってもらった青色申告書を大津税務署に発送。2000年も一年、順調だったということだ。

「児童心理」5月号原稿の校正。編集担当者が講演会の告知欄外掲載を打診してくれる。トーク2001のチラシ・イラスト入りを完成。夜は川

崎君（本誌連載中）が来る。四方山話が楽しい。

1998年三月末で公務員を辞めて独立し、2000年度の確定申告で、まずまず順調だと書いている。

この段階ではまだ立命館大学には勤務していない。50歳からフリーで働き始めて丸三年。今振り返ると、よくぞあの時思い切ったものだと思う。そして一度の後悔もなく現在を迎えられていることには感謝である。

「あの時でなければ出来なかった・・・」、後からそう思うことは沢山ある。「あの時、思い切ってやっておれば・・・」と思うことも沢山ある。するも、しないも、自分の選択だからね。

月刊誌「児童心理」に連載することになったのも、トーク2001を開催する事になるのも、みんな思いがけない巡り合わせだった。

3月◆日 朝、妻から昨日おこなわれた娘の声楽の先生のところの試演会の話聞く。年長者が多かったらしいが、こと葉はなかなかの評判だったとか。仕事場にきても日曜日だからのんびり。

「季刊発達・春号」の校正をしてイラストを描きあげて発送。仕事場D・A・N通信の製作準備をはじめ。

帰宅夕飯後、アーカス（自宅近所の映画館）に電話すると「小説家を見つけたら」をやっているというので出かける。いい映画だった。「**第一稿はハートで書け。推敲では頭を使え**」に、わが意を得たりの気分になる。

それにしても今年は一月から、映像に淫している。そうしようと思っているところもあるが中毒はこんな感じかとも思う。

気になるのは、この頃映画館で上映中に必ずトイレにいきたくなること。癖になってしまっただけ二時間もたない。直前にトイレにいても、心配になる。他ではそんなことはないのに、映画館だけである。夜になるとおねしょの心配していた小学生時代のようだ。

そうか、こんな時期からもうトイレが近くなっていたのか。最近のことだと思いこんでいた。今も夜中にトイレに目覚めることはほぼないのだから、確実に心理的なモノである。

それはさておき、ほんの十二、三年前なのに、あの頃はまだ映画の上映情報は「ぴあ」か、新聞告知か、映画館の電話サービス頼りだった。

一昔遡るだけで、社会のインフラがゴロツと違っている。産業構造も大きな影響を受けてしまう。終身雇用制を維持し続けた日本社会の労働慣行が立ちゆかなくなった背景だ。

そして新しい、労働者の権利擁護システムに向かわず、ぼっさりと大量の非正規雇用化を押し進めた。その結果、給料の安い、雇用の安定性のない、専門職パートタイマーも世に溢れることになった。

これに手を付けることを黙認したのは、当時中堅どころにいた団塊世代の我々だろう。

「自分たちは既得権を確保しておいて、次世代に厳しい条件を押しつけたベビーブーマーめ！」と、世界中で思われている。

年寄り達も、振り込め詐欺や投資詐欺にあったりしていないで、下の世代のために出来ることを真剣に考えなければ駄目だろう。アンフェアな変化を是正するために動こうとしない持てる者は、加害者である。

娘の声楽の話に私はほとんど関わっていないから知らない。ミュージカルを勉強したいと言い始めたときに、ならばと動いたのは妻だった。私はそんなことに意味があるかどうか・・・と思っていたが、さすがは母親だった。姉の知人声楽家を紹介して貰い、付き添ってレッスンにも行った。後から考えると、これは有益に機能したのだが、その時にそう思うことは難しい。

チャンスのありそうにない我が子の未来の夢に、効果があるかどうかなんて問いたさず、目いっぱい可能性を拡げる努力に付き合う人を偉いなと思う。私には出来ないことのような気がする。

そういう有り難い親の下で育つ人もあるが、そんな親ばかりではない現実もよく知っている。

3月◆日 毎年一度、年度末に描いている京都府知的障害者更生相談所の機関誌 t a n t o 用のイラスト原稿をフィニッシュ。

夕刻、妻が車で迎えにきてシメオン夫妻宅へ。いよいよスイスへ戻れることになって、お別れホームパーティ。深作さんと早樫君(本誌連載中)夫婦が一緒。スイスの家庭料理(フォンデュなど)をご馳走になる。出かければ楽しい時間を過ごせるのだが、私はこういうパーティのような場には出無精である。限られた馴染みの場や、心地よい一人が好きだというのは私達夫婦共通している。

退職後もしばらく、知更相のニュースレターイラストを描き続けていた。この機関誌は自分が在職中に創刊したものだったから愛着があった。しかしそんなものもドンドン風化して消える。発展解消するのではなく、消えてしまうのだ。

京都府での組織仕事の中に今も残っている私の発案もあるようだが・・・。

公務員は組織で仕事をするのだと言われ続けたが、仕事の出来ない人を組織が守ってしまうところもあると思っていた。言ったらやらなければならないから、「触らぬ神にたたりなしだ、私の在職中は騒ぐな!」、と本庁係長だった男から、暗にたしなめられていた気がするのは被害妄想かな?

シメオンさんは第一期の KISWEC 家族療法訓練の先生である。先ず通年で二年間、そしてその後のプログラムで、繰り返しお世話になった。

スイスへ戻れることになり、訓練の後を継ぐ者を募られた。そして通年コース並びにWSを私達(団、木村、早樫)が引き受けた。この勧めに応じたことが、その後の私の人生全体の展開に繋がっている。

シメオンさんはそれから数年して再来日され、又一緒に仕事をするようになった。そして、この時はいよいよ、完全に日本を引き払うことになるお別れの会食だった。

3月◆日 朝は相談室。午後、立命館大学へ。大学院の「家族クラスター」担当者三人、第一回の打ち合わせである。学而館の場所が分からず焦る。村本邦予さん(本誌連載中)に初対面。二時間ほど新スタートのプランなど話し合う。仕事場に戻って、家族面接中のKさんの学校の担任と生徒指導の訪問を受ける。

そうか、この時が村本さんとは初対面だったのだ。中村正さん(本誌連載中)と彼女は多少面識があり、仕事上の関わりもあったらしい。私とは全く接点のなかった二人と、この時の遭遇から14年、結果的に随分長い付き合いになった。出会いとか相性というのは不思議なものだと思う。

3月◆日 隔月に開催する日曜日の「仕事場D・A・Nミーティング」。古川くん(本誌連載中)、久田さん、千葉くんの三人が出席。話題の一つ、「性教育の話がセクシーじゃない」ことについての議論が面白い。あっという間に時間が経つ。

公務員退職前に、京都市内の便利な場所に、ちいさなマンションを借りておいた。1998年4月1日、仕事場D・A・Nと名付けてスタートしたが、ここで開業する気持ちはなかった。

場所を設けたのは、京都府を辞めて一人仕事になる中で、近接領域の人たちと交流できる空間を確保しておきたかったからだ。今はもうやっていないが、この隔月日曜日の午後半日かけたフリーミーティングも結構長く続いた。

組織業務なら会議やミーティングが必然だろう。しかしフリーになって動き始めると、ドンドン孤業化していく気がした。ネットワークといいながら、公式の場でしか会わなければ、公式見解にしか触れることは出来ない。非公式の集いの持つ意味は大きい。

この長く続いた集まりは、徐々に参加者が増えて7、8人が集まることも多く、遠くから来る人もあった。本誌16号から新連載の大石仁美さん

の病児保育所計画を話し合ったのも、このミーティングだった。

3月◆日 今朝の家庭裁判所の新件は、あまり一般的な訴えではない。変なファクターが入ると、双方が変になるのだろう。

退職して直ぐ、家裁の調停委員の仕事を手野田正人さん(花園大学)から打診された(野田さんは今、立命館大学院で同僚だ)。関心なかったし、思ったこともなかったが、五十歳そこそこの男性調停委員が欲しいということと、心理臨床経験者という二点から、強く求められて受けることにした。結果的には興味深い経験になり、五年余り、その後、参与員なるものも併せて引き受けることになった。

親権問題や離婚、DV等、児童相談所時代に養護問題として遭遇していた家族に、夫婦として数多く会った。そしてここで会うのは、児相時代も経験がなかったわけではないが、それより多くの嘘つき達だった。

結婚の破綻というのは、いきなり元の赤の他人に戻るプロセスだから、それぞれの親世代もつるんで、児相のような親子関係の問題解決の場よりも、更に誠実さは蹴散らされていた。

3月◆日 朝は相談室勤務。Sさん夫妻来談。ニコニコである。五年間不登校だった娘が、受験してT高校に合格したのだ。本人も不変だったろうが、よくやった。親を勇気づけて、次は妹の課題にも取り組みを。

午後、決まっていたS県での講演が、相手方の都合で日程変更の連絡。しかしその日程が合わず、苦心の末、中止。夜はK I S W E C月例SVプログラム。参加者から事例提供二件。

不登校、引きこもりケースには数多く会ってきた。家族を対象に問題解決を考えるようになってから、見守って待つだけのようなことはほとんどしなくなった。

一律になどとは思わないが、家族力動に焦点を当てると、何かできることはあるものだった。そしてたくさん家族の課題を軽減、解決出来てきたと思う。

世の中は相変わらず不登校、引きこもりからの長期化課題を親に抱えさせたままだ。教師、援助職者、その他の専門家は、そう遠くない日に手を引く。永久担当者など居るはずがないから、仕方ないことだ。そして最後に親が残って、見通しもない長い道の子どもと歩むことになる。

他に出来たことがあるのに、なぜこんな事態を懲りもせずに量産し続けているのか。カウンセラー、相談員、ワーカーなどと名乗っている人たちに問いたい気持ちが今もある。

そしてそんな業界を形成して、そこが飯の種になっている大学教員にも苦言を呈しておきたい。

私達は内面や心だけで生きているわけではない。積極的に何とかしようとする努力を、無神経で強引な業だと批判しておいて、見守りのあげく、最後には手を引いてしまうのはいかなものか。

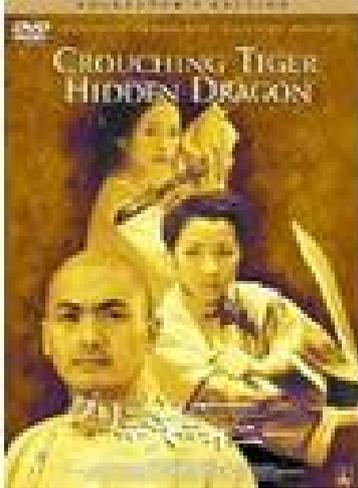
人はなぜ思春期のつまづきを、一生の課題などとしてひきづらなければならないのか。片付くものもあることや、そこから新たな人生が拓けることを、なぜ軽率なことのよう語るのか。我が子に長い苦難の道しかないなどと、言わなくても良いのではないかといつも思う。

3月◆日 昨日から読んでいる宮部みゆき「模倣犯④」、今のところまだのめり込みがない。DAN通信を完成させ、折って発送準備。講演会の告知、4月23日からの「ぼむ」漫画展(大阪・現代画廊)のこともあり、関西エリア分を先に発送。

広島震源地の地震、思ったより被害が出ていて驚く。広島市在住の岡田さん(本誌連載中)から無事だが、家屋被害あり…とのメール。京都ではほとんど感じないくらいだったので、神戸の震災時より鈍感だったが、あの記憶がみんなにあるから怖かったらと思う。

ちょっと忙しいのだが、みなみ会館のレイトショー「グリーン・デスティニー」を観にゆく。ア

カデミー作品賞候補になっていることには、少々違和感がある。でも、確かによくできた映画だと思う。ワイヤーワークも凄い。ああいう技術を駆使できるのは中国映画だけだろう。「初恋のきた道」のチャン・ツイイー、まったく違った役だが、キリッとしている。



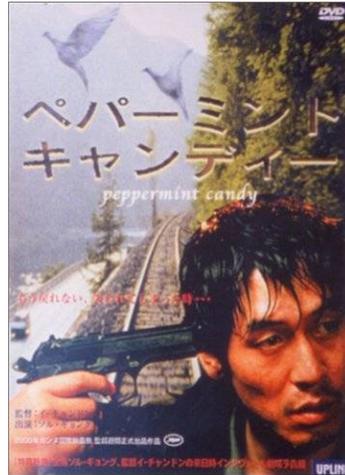
好きな映画を観る。好みのものや良かった映画のDVDを購入する。好きな本を買って読む。時には、買ったまま置いておく。こういう贅沢が出来るようになった。これ以上の贅沢を思いつかないから、欲望を満喫できている。その結果が仕事場や自宅の壁面を覆い尽くす。

「断捨離」の言葉を目にすることが多くなった昨今だが、そんな気はさらさらしない。好きなものに囲まれて、許されている時間を満喫したい。本の背表紙それぞれに、思い出や意欲、後悔が張り付いている。後始末のことを考えるより、まだまだ前のめりに好きなものの世界を満喫したいと思う。

3月◆日 通信の発送を済ませてしまいたくて、つけっぱなしのTVの横で、ひたすら折ってシール、切手を貼って、ほぼ400通の発送準備が済んだ。

一日TVを見ていると、ワイドショーでいろいろ言っている人のレベルがわかる。そしてもう、マスメディアのコメンテーターはやめておいたほうが賢明かなと思う。何にでも意見を持ってしまおう出演者の恐ろしさ。

夜中、新作ビデオ韓国映画「ペパーミント・キャンディー」を観る。時間をさかのぼってゆくことで、結末の哀れさや無情がひしひしと伝わってくる映画である。まるで、お葬式の時に故人の思い出を、それぞれの時代を共有した人が口々に語るような作り方。ちょっと感動的、いや大いに感傷的だった。



ここで書いている通信は、「DAN通信」。手作りの郵送で四百部余りを発送していたモノだ。今ならツイッターやfacebookで簡単にメッセージや情報を届けることが無料でできる。

しかしこの頃は、制作して、コピーをして、封入して、切手を貼って、投函する。手間暇コストを考えると、よくやっていたモノだ。

当時、ラジオや希にTVにも出演していた。そして文化人枠のコメンテーターに分類されつつあった。自分を大事にするなら、そんな場でコメントしたり、振る舞ったりするのは危険だと感じていた。他人に嫌われたくはないと思ってしまう人間だから、余計に用心が要ると思っていた。

映画「ペパーミント・キャンディー」は韓国の苦い名作だ。TSUTAYAレンタルで観たのに、後日DVDを購入した。そして、家族療法学会誌の連載「連想映画館」でも取り上げて長い文章を書いた。

3月◆日 4月早々に娘がいよいよ東京の専門学校に出発する。その引っ越し荷物も家を出た。

父親として、はなむけのメッセージを何日かかかって書いていたのを完成させる。それを三年前、

自分が独立して仕事場D・A・Nを構えた時、挨拶状に使った春色の紙にプリントアウト。出発の朝に手渡すつもりである。

今夜は祖父母含めて一家七人で本宮の家に集合。長男の東京進出と、長女の入学祝いの宴。就職して家を出て、独身寮住まいの次男。このフルメンバーが揃うのは最後になるのではないかと思う。

父は八十四才だし、母も七十九才である。居なくなる順番さえ入れ替わったりしなければ、幸せだと考えよう。

父は八十八歳、母は八十六歳で亡くなった。四年後と七年後だ。だからこの日の後も、何度かは正月などに一家七人が揃うことはあったと思うが、家族は発展的に散らばり始めていた。

娘は未だ自分がどうなるのか、皆目見当も付かない状態で、「ミュージカルの勉強がしたい」と言って、大学ではなく、舞台芸術学院という専門学校を選んで東京に出発する四月だった。

娘に宛てた手紙といらのは、ずっと昔、付き合っていた女性の妹に、彼女が厳しい状況に直面したときに、父親が手紙を書いた話をしていてのを覚えていたことだ。いつかそんな事があつたら自分も思っていたが、ここで実物になった。

そして私もこの4月から立命館大学大学院の教員になることになっていた。振り返ってみると、沢山の出発が交錯した春だった。

編集後記

- 当然のことながら芸人ではありません。藝と呼べるようなものの持ち合わせはありません。ならば有益な情報かと問われても、ためらいはあります。「何なんだ？」と聞かれると、説明に困るのです。「面白いのか？」と問われたら、面白いと思ってもらえるよう努力したいと答えます。多くの人を集めようとは考えていませんが、来てくださった方が楽しんでいただけたら、「人生は表現行為でありエンターテインメントである」と考えている私の本望です。
- ◆トーク2001に来ていただいた方に、何かお土産を。そう考えてつくったのがこの冊子です。昨年の第一回目の講演会でも同様のものを作りました。多くの方は既に、「仕事場D・A・N通信」をご存じだと思います。ご覧になったことがない方は、お帰りになってから、「仕事場D・A・N」に住所氏名をハガキでお知らせください。最近号をお届けします。

トークライブ2001用

仕事場D・A・N通信 第一号のあとがき

ここで書いている第一回目の講演会は、「不登校の解法」文春新書 を発行したときに、早樫さんと古川さんが開催してくれた出版記念講演会。(於・ハートピア 京都)

大学院で教員をすることに誘ってくれた中村正さんは、この講演会で私の話を初めて聞いて、後日仕事場にやってきた。

そうそう、この新書「不登校の解法」は知更相時代の同僚CW芦田さんの弟さんが、文藝春秋・新書部にいるという話から、出版への道が拓かれていったのだった。